

応化会だより

昭和49年3月 第16号

早稲田応用化学会

会長就任にあたって

棚 橋 幹 一

このたび計らずも伝統ある応用化学会の会長の重責を汚すことになりました。初代会長小林先生から数えて8代目にあたり身にあまる光栄に存ずる次第です。わが応用化学会は、大正12年に設立されて以来昭和47年に創立50周年を迎え、同年11月18日東京工業クラブにおいて盛大な記念式典が挙行され、引続き祝賀パーティーが催され多数の先輩各位ならびに教室側の御出席を戴き、これまたきわめて盛況でありました。さらに創立50周年の記念事業として出版物を刊行することが決定され、記念誌編集委員会を設けて種々協議し、教室側ならびに各界で現在御活躍の先輩各位の御協力を得て数回に渡る座談会を開催し、現在委員会において資料ならびに粗稿の検討を行ない間もなく刊行される運びとなっております。ただここで誠に遺憾なことでありますがこの意義ある応化会50周年事業の計画中に当時の会長であられた石川教授が御病気で入院され、記念式典にも参列されず、御病床にあっても種々御心を配られておられました。翌昭和48年2月に急に病が重くなられて遂に帰らぬ人となられたことであります。まことに哀悼にたえず、応化会としても実に残念なことであります。和は石川会長の前の水野大先輩の会長の時代から副会長として会長のお手伝いをしていました関係で、石川会長御逝去後、同年2月の応化会運営委員会において次期会長として満場一致の御推薦を受け、甚だ非才で全くその任ではありませんがこの重責をつとめさせて頂くことになりました。

丁度関東大震災のあった大正12年に学校と卒業生を結ぶ応化会が発足してから既に半世紀以上が過ぎたわけであります。この50年の長い歴史を顧みると、わが応用化学科は学生、ならびに卒業生の数は初期においては比較的少なかったものでそのまともにも非常によく、応化会としても毎月1回例会を開催して卒業生、学生が一同に会して大いに懇親の実を上げ、また早稲田応用化学会誌を発行して研究発表機関の不足を補う等、幾多の業績をあげてきたのであります。この様に応用化学科の発展と共に応化会も校友との連帯制を一層強めるため会長も校友側から選出される様になりました。卒業生会員は化学工業界のあらゆる分野で活躍され、全国の化学関係の主要工場には誰か必ず応化会の会員が勤務している程であり、また研究方面でも博士の学位取得者が60名を超えているものと思われます。特に最近卒業生も年々急激に増加して卒業生と学生を合わせると総会員数が3000名を超えている現状であります。さらにこの数は近い将来飛躍的に増加するものと思われます。この様な状況においては応化会としては発足当時のように会員相互間の親睦や会誌の発行など会の運営の基礎となる資金の問題や、そのもととなる会費の徴集も仲々困難な状態ですが、新しい時代に即応した有意義な催し等を計画して魅力ある会の運営を推進して当会の発展を期する所存であります。

応用化学会では昨年夏、50周年記念誌出版の資料収集のため、各年代層からの代表の方々にお集まり頂き、4回にわたって座談会を開催した。その際多くの方々から最近の学園紛争についてのお話が出たので、身近かに体験された村井重兵衛氏（新11回、住友スリーエム）、井上健氏（新19回、日産石油化学）および教室の宇佐美昭次教授（新5回）に執筆して頂いた。

六〇年安保の学生時代

村 井 重兵衛

1972年11月、母校の学生川口大三郎君が母校で殺害されたというニュースを知らされた時には憤りとも悲しみとも言えない気持ちにさせられました。何としても母校の中で母校の学生が殺されるという空恐しい事件が起らないように出来なかったものだろうか。連合赤軍事件が、彼等の暴力行為の極点と終点をそれ以上にならない形で証明してみせた時には、正直いって腹が立ちました。学園生活を十余年以前に経験した我々にとっては、学生同志、仲間どうして血を流し合うなどという事はとうてい想像すら出来ません。

今、我々の学生時代の思い出を記すように依頼されて筆をとったのですが、我々の時代は60年安保という歴史上それまでになかった大きな出来事があったのですが、その思い出がかすんでしまうように、これらの空恐しい諸事件が頭を占領してしまいます。

とにかく依頼もあるので、我々の学生時代の一面を思い出してみたいと思います。

早大事件により解散状態にあった理工学部学友会の再建の動きが起りだしたのは、1957年の75周年早稲田祭の時だと聞いています。この年の早稲田祭には、応化はもちろん、他の学科も参加し、建築科の“近代・アパート計画展”や“オートメーションと原子力展”などは、大きな反響を得たものでした。しかし、統一組織を持たなかった現工学部は早稲田祭の激烈な予算ぶんどりに、あざやかな手さばきを発揮できず、その時の不手際の原因を話し合う代表委員の間に、“学友会”の必要性が話されることになったようです。

指導教授の参加のもとに、1957年4月に一理学友会設置準備委員会が発足します。いわば、教授の発案と早稲田祭の苦勞が、理工学部学友会解散以来、ねむっていた自治の目をさめさせた形でした。その年6月ごろとられた全学部学友（2100名）に対するアンケートの結果は、学友会設置賛成70%、反対10%、回答なし20%でした。

当時の学友会設置の考え方は、“新入生の諸君へ”というパンフレットから見てみると、「高い授業料、木造のボロ校舎、実験設備の不足、狭い教室、余りにもせまい図書室…学生の意見が反映されない機構等々。人間形成に大きな役割を果す文化活動、サークル活動も殆んど行われていない。毎年行われる早稲田祭、ボートレースも、学部立案で、

学生はその場限りの臨時委員会にかぎられている。……」という、いわば“生活”の中にあったようです。

他学部はすでに学友会、自治会が設置され、早稲田祭等も、その組織によって参加していたのですが、理工学部のそれは、なかなか認められず、白眼視する教授も相当あったように思います。なんといっても学生が政治問題について発言をすることは困るという考えにあったようです。また、理工学部学友会が生まれると、中央自治会が復活することになり、政治運動への拍車がかかるという心配が大きかったのではないかと思います。

新入生歓迎会、ボートレース、早稲田祭等々と、学友会設立準備会の形でとりくみ、かなりしんぼう強く正式承認運動を続けました。しかし、なかなか正式承認が教授会から得られず、「準備会が作った会則はたしかに完全にできていると思う。しかし政治活動が激しい他学部の会則とくらべてみるとまったく同じようだ。会則が完全であっても、実際の自治会活動がどうなるかが問題だ」というのが承認できない理由でした。

学生側からは、一体政治活動とはどういう活動をいうのか具体的に説明してほしいという質問が出されたのですが、毎回の学生側と学部側との会議では、この点になると堂々廻りになり、結局、2年8カ月間ののち、正式承認を得ないままに、準備会から学友会への仮発足が行なわれました。応用化学科でもクラス毎に何回かの討論が行なわれました。確かに、私のクラスでも反対する人があったことを記憶していますが8割以上の賛成者がありました。しかし、この8割の賛成者も意識的に政治活動を展開する組織として、学友会を考えていたとは思えませんでした。我々の学年は40名ずつ2クラスありましたが、何回かのクラス討論でも政治問題といえる事柄を話し合った経験がなかったように思います。

しかし、当時、先生方の大方が学生の政治活動にひどく神経質だったのは、一つには当時の政治情勢に原因があったのだらうと、今になって思います。しかし、同時に、学生側と先生方の間に、正確な意志の疎通が欠けていたのではないかと思います。一言に、意志の疎通というけれど、その中味は、これくらい容易ならざるものはないようです。そのためには膨大なエネルギーが求められるでしょう。しかし、この2年間程に起った学生のいまわしい諸事件が、この意志の疎通の不足にいささかでも遠因があるならば、再び流血を見ないためにも、どれだけのエネルギーを消費しようとも意志の疎通をはかる仕事をしなければならないと思いました。

学園を去った後は、学校と殆んど無縁の形でいるわけですが、このまゝでは済まない、何らかの仕事を手伝わなければならないというのが一番の反省でした。

学園紛争の“落し物”

井 上 健

最近の早稲田、特に理工学部では、平静が保たれ、学園らしい雰囲気は蘇がえってきているという便りが、私の耳に入ってきています。研究、勉学、クラブ活動等に打ち込める雰囲気は素晴らしいことだと思います。

しかし私が在学していた頃の揺れ動いていた学園を思うと、信じ難いような気がしないでもありません。というのは、40年の授業料値上げ反対に端を発した、第1次早稲田闘争、44年をピークにした、日大、東大闘争及び70年安保を背景に持った、第2次早稲田闘争で、浮彫にされつつあった問題は、どこへ行ってしまったのだろうか？と。

学生運動は、政治色が強く、又その行動がエスカレートしていたことは確かだと思いますが、学園全体が揺れ動いていたのには、もっと学園として現実的な、それでいて学生にとっては最も重要である“生き方”そのものの問題があったのではないかと思います。

学生にとって、歴史の積み重ねの中で、自分達がどのように生きていくかは、特に重要な課題として、それぞれの個人が持っていたはずです。又、理工学部の学生として見れば、科学の急速な発達に伴ない、科学者として、或いは、技術者として、専門のみならず、社会において果す役割が如何なるものであろうか、と懸命に思考していました。その背景には、公害問題、軍事研究問題、或いは、社会、経済のアンバランス等がありました。勿論、これらは、今なお課題として生き続けている問題です。

このような学生の状況をふまえて、再び“学園紛争”の過程に戻ってみることにします。

40年の第1次早稲田闘争では、授業料値上げ反対が口火だったことは、前にも書きました。教育の機会均等が叫ばれている中で、私学のみが負担が大きくなっていくことに、疑問を持ち、又自分達には関係のないことであるとして、安呑としていることに心の痛みを感じたもの達の反対運動として始まりました。授業料値上げ反対に立上った学生達は、勿論、それ自身に強い関心を持ち運動を積み上げていきましたが、それに加えて、この一つの問題を媒体として更に、広範囲な問題を学生間で、そして学生と先生方間で真剣に考えていきたいという部分も、かなりの割合を占めていたと思います。しかし、この運動の中で、多くの先生方が、学生の動きを、いわゆる“学生運動”として拒否反応を示し続けていたことが、大きなしこりを残すことになってしまったと思います。学生達は、“拒否反応”に出あった為、最初は面喰らい、そして徐々に不信感が湧き出して来たものです。この闘争の終末は、学校側が多少折れてきたことと、そして問題が一私学のみでは解決しないこと等により、又、学生大部分と尖鋭化した運動を続ける学生

との離反が起きたことにより、幕がおりました。

しかし、このような“運動”を経験した学生達は、問題が煮つまらぬまま終わってしまったことに対して、自身に対するふがいなさ、討論にならなかった先生方に対する不満を、心の隅に絶えず持っていました。その為、一つきっかけがあれば、すぐ表面に出てくる状態にありました。

43年から始まった第2次早稲田闘争は、政治面では、大学管理法、及び70年安保の阻止運動、又他方学園の問題では、日大東大闘争により口火を切られた、根本的に大学、そして学問、研究のあり方を考え直そうとする動き、この両者が重なりあってはじまりました。大学内での学問、研究、教育のあり方については、今まで殆ど動きを見せなかった大学院生が、最初に問題として取り上げ、活発に動きだしました。(この時の大学院の1、2年生は、40年闘争当時、一番闘争を身近かに体験した学生であったことを付け加えておきます。)

研究テーマを持っている大学院生としては、科学の持っている理論、及び方法論を、実践吸収する中で“フィロソフィー”を作りあげ、更にその上に立ち、研究テーマを追求していく、一つの方向性を模索していました。勿論、これは学生に限らず、研究者としては当然としているはずのものでした。しかし、たまたま理工学部内の一教室で“軍事研究”が行われていたことの発覚に対し、研究者＝先生方は、殆どがおし黙り、或いはある一部では、弁護しようとさえしました。私達学生は、本当にこれが研究者の“フィロソフィー”(研究テーマと社会とのつながりも当然この“フィロソフィー”に入っているべきものだと思います。)なのだろうか?と、大いに疑問を感じました。

この“フィロソフィー”は難物である為、簡単に結論が出せるものではないと思われます。しかし、これを模索しながら研究していくことが真の研究者の姿勢だといえるのではないかと思います。そういう意味でも、学生の問題提起に対し、先生方が“拒否反応”を再び見せ、共通の問題として充分討論出来なかったことは、残念なことだったと思います。

“学園紛争”は、時間の経過と、問題点の“発散”により、焦点が定まらなくなってしまったこと等により再び幕がおりました。しかし、ここに“フィロソフィー”の模索という、学園紛争の大きな“落し物”を残してしまったのではないかと思います。

現在の学園は“静か”であるときいています。先生、学生共冷静でいられる今こそ、この“フィロソフィー”の模索に力を入れるチャンスだと思います。早稲田大学が私学としての良さを持っているのは、この“フィロソフィー”を打ち出せることにある、とさえ言えるのではないのでしょうか?

学 生 問 題 雑 感

宇佐美 昭次

いつの間にか卒業して18年経過し、時の流れのはやさを感じる年頃になった。この間、社会情勢は大きく変化したが、また様々な形の学生問題も経験してきた。

いわゆる反体制運動には政治的、社会的、経済的な因子がからみあっており、その時代の社会情勢の縮図ともいえよう。わが国では、それまでの左翼運動の思想とは性格を異にする学生運動は1960年頃から起っているが、これには新日米安保条約の改定とともに高度の経済成長政策とは無関係ではなかったろう。賃金の上昇は頻繁な学費改定を余儀なくし、政府の私学軽視はそれを助長する。この学費改定は政治に無関心な学生をひきつけ、さらに学寮、学生会館管理運営権、さらに当学部において学友会の承認問題（他学部では早くから正式な学友会が存在していたが、理工学部は大学の夜間部廃止の発表を契機として昭和34年仮学友会が発足、これも10年近く承認されていなかった）がからんで、他大学、他学部と同様なげいしい学生紛争が起った。これらの学生運動は反体制運動の流れとして生じたものであり、その結果、大学解体論となるにおよんで、急進的な思想は多くの学生を次第に遊離させた。一方イデオロギーの対立は全学連組織の解体となり、多数の派閥を生じ、これはまた各大学、各学部の学友会の主導権争いとなり、残ったものといえば昨今のような陰惨な事件だけということになってしまった。

この学生運動のなかで提起された問題には大学が真剣に対処すべきものもあるが、同時に大学の本質論にもかかわる内容のものも多く、一大学で解決できる性質のものではない。戦後の学生の膨張は大学を巨大化し、その性格も研究機関的なものから高等教育機関への変り、量的質的变化を余儀なくされた。この大衆化はある面では学生問題の根本的な原因かも知れない。そして根底には学生の大学に対する不信感が介在したであろうし、それまである種の信頼感の上に成り立っていた大学と学生、教員と学生との関係がくずれたことに起因しよう。

とくにわが国では社会構造の急激な変化と、これにともなって親（父兄）の子（学生）に対応するしかたが著しく変ってきており、これが学生の気質の上にも大きく影響しているように思う、こうした学生の気質の変化に対応しきれないのが、教員のいつわらざる姿でもあろう。この解決には対話を回復することが是非共必要であるし、教育方法に検討を加えることも考えなければならないが、要は教員の学生を知ろうとする心構えの問題である。一方、教員は（というより私は）学生に対して言分がある。親が子を思う心情は動物的な本能であって犬や猫の類でも全く同様である。学生は年代からみても社会の中においても、大学の中においても幼児的な甘えは許されない。いわば人間としての

責任と自覚が必要であって これこそ万物の霊長だけが遂行できる崇高なものである。
切にこれを期待するものである。

随 想

リング、色男、回想記

東 正 夫

昨年の春、停年になり引続き囑託として或プロジェクトを担当しているが、何しろ現役と違って「色男金と力は無かりけり」で、之から一と花咲かせるつもり、然し中々大変です。

一昨年10月19日NHKによって、早慶リング事件をテーマとした「折れた指揮棒」が放送され、そこで小生がリングを投げた犯人として、茶の間に写し出された。放送が終ったトタン友達連から電話がかゝるやら、会社や会合に出れば酒の肴になり、弁解や応答にヘコタレてやっと人の噂も75日ヤレヤレと思っていた矢先、応化会の佐藤先生から電話で、何か書けとの黒羽の矢的御依頼。NHKに懲りたのでお断りした所、早応化会にも、「ケッタイナ人」が居ると言う見本を示す為であろうか、人の気も知らないで、原稿用紙が送られて来た。NHKにはOKし、早応化会にはKOではと思い直し、今度でもう此の事件からは縁切りと、書く気持になった次第です。

オールドボーイには懐しい早慶リング事件の導火線になった、カジリカケのリングをオミズこと水原に投げたのを私であることを知っている者は、同期生で悪友で且応援団に所属していたA君の外5人位です。後で述べるが、事件後早大は六大学リーグより追放との大騒動にまでなったのを、山本忠興先生（何とテレビの先覚者であられたのも因縁でしょうか）の御骨折で和解成立メデタシメデタシとなったのであるが、その当時はリング犯人だなどと判ったら大変なことになるぞと言うので、悪友共黙っていようと言う事になり今日に到ったわけです。所がNHK放送前の打合せの際、妻も初めて知って、出るのはよして下さいよみっともない とやられた様な始末です。

話は一昨年の9月、君が突然会社に来て近くNHKから電話があるよ と今思えば不吉な予言を伝えたことから始るのであるが、私には何の事か判らなかつた。数日後、NHK教養部の者ですが是非合いたいと電話があつた。何の用ですか、と聞くと 早慶リング事件についてと言う。之には驚いて、知りませんよ、と答えると、駄目ですよAさんからスッカリ聞いて居ます、と言う。ガクンときてAの奴めと思ったが仕方がない、指定された所でNHKのI氏と会った。そして早大の後輩のI氏から今回リング事件を

NHKで取り上げた理由を聞かされた。

NHKに寮歌祭と言うOB連共が昔に返ってドンチャカドンチャカ歌ってハネマワル番組が長年続いている。今年から私学として、早、慶が初めて加入する事になり、その早大応援団OB連とNHKとの打合せの時、早大OBのM氏が、リング事件で、行方不明と伝えられている慶応の指揮棒を持っているが、今年は早慶で久しぶり優勝を争う年でもあり、此際返し度いとの申出があり、続けてA君が、あの時リングを投げたのは私の友達だと発言したので、NHKはコリヤイケルと言うことになったのだそうである。40年前の事を今頃になって取り上げるとはとI氏に言うと、御迷惑はかけませんし、3分間位ですから是非出てほしいと言う。私は事実は認めるけれども、この事件は、今のゲバ学生や、プロ野球でのヨッパライ乱入と間違えられては迷惑で、事件のバックグラウンドをよく判って貰はないと困る。

背景としては第1に、愛校心を持った若者と、その時のエキサイトした試合の雰囲気があり、第2には不況の世の中の当時ではありながら、然し我々には楽しい学生生活があったので、此の事情を見る人に判って貰えないと、私の本意は3分間位では到底説明出来ないからと断った。所がI氏は 台本は構成中だがその様に考えて居り、是非御意見を伺い度いと「オドシヤ」をかけられ、私がリングを投げた心境や、その背景をすっかりしやべらされてしまった。その結果 結構です結構です是非取り入れさせて載いて台本は出来次第お届けすると、承諾させられた。「口は禍のもと」と反省したものの、すでに後の祭り。今回も「筆は…」にと思えど、之も後の祭り。

枕言葉が多すぎて、オードブルに食傷された様であるから、本料理はお茶漬け程度にしよう。私が第一学院に入ったのは昭和6年、当持は不況、7年は5・15事件、9年は満州国帝政、11年は2・26事件と急激に変わりつゝあった。然し夫とは全く無関係と言って良い程我々学生にとっては、良き時代であり、青春を謳歌した。官学、私学の格差はあまりなく、教授との交流も深かった。

野球と言えば、当時の我々の情熱の最大のハケグチであった。プロ野球はまだなく、甲子園の中学野球はとも角、六大学リーグが最高のレベルであり、愛校心をかけ、応援団の指揮の下、校歌、応援歌の練習をよくしたものだ。だから今でも、シャンソンと共に当時の応援歌なら殆ど合唱出来る。

昭和6年入学した春は、伊達の3連投、三原の本盗で、夫迄慶応に負け続けていた我が校が勝ちに転じ、7年も勝、そしてリング事件の8年になる。私達は早慶戦を、ハーバート、エール戦、オックスフォード、ケンブリッジ戦と3大対抗戦位に思っていた。昭和7、8年は特別な試合方式で、春季1試合、秋季2試合と言う変則制であった。(10年から又現在の春秋各2試合に復活)。昭和8年は私の学院3年の年で、慶応には最上級の水原を初め、岩本、岡、川瀬、井川等所謂慶応スマート型の名選手が、腰本名監督に引き入れられ、当方は若原が投手としてデビューした年。春(一回戦)は三原がいたが1対5で

負、(三原は秋は妙子夫人問題で退部不出場)。

秋は今も忘れる事が出来ない。10月21日(第2回戦)は9対1で大勝。そして翌日運命の第3回戦。試合は前日とうって変ってシーソーゲームとなり、6回には6対6の同点。試合は白熱、一球毎に大歓声をあげて大変な騒ぎ。我方は8回表に2点を入れた。紙フブキを飛ばし勝々ムード。所が8回裏慶応に1点返され1点差。その時、岡が2盗失敗でアウトになった際、3塁コーチにいた水原が飛び出し腰本監督と審判にアピールした。当時は審判絶体神聖であったから大変、満場騒然となったが勿論審判判定通り治まって9回表に入った。

私はサード水原の近くの前から3列目で声をカラシテ居たわけであるが、とも角、水原の見事なプレー、くる球、くる球、アザヤカにさばいて、その後は例の水原ポーズだから、シャクでシャクでたまらず、遂に無意識にカジリカケのリングを水原めがけて投げた次第。リングはコロコロと水原の足の所へ、水原は夫を拾って、ポイと投げ返した。又々騒然となったが試合は続行。

結局、9回裏我方は逆転負け。我方応援団は大騒ぎ、球場になだれ込み(勿論私も)こづき合いが行はれ暗くなる迄ニラミ合い。夜は銀座で両応援団の乱闘事件があり、翌日の新聞には指揮棒ブンドリ事件も入って大ニュースになってしまった。

まあ私がリングを投げた時の心境としては、慶応のスターキングだった水原に抵抗した、チョッピリハムレット性をもったドンキホーテと言った所で、之も愛校心の発露であろうか。

これで、いかなる心境と、背景が私をしてドンキホーテにした次第を述べた。読まれた方々も、書いた私も御苦勞様で この稿を終るが、此の次は 色男再起談でも、投稿したいものである。

叙勲、受賞者

- 山本研一名誉教授
- 勲三等瑞宝章
- 森田義郎教授
- 燃料協会学術賞

会員訃報

下記の諸氏の御逝去の報をうけました。謹んで哀悼の意を表します。

林和雄殿(旧5回) 三村倫次郎殿(旧11回) 苦米地和雄殿(旧21回)

小川寿男殿(新3回) 岡崎 和殿(新3回)

飯島徳次殿(新5回)

か べ

長谷川 和 美

現在、教室で講義を受けているが、活気の満ちているムードが少ない。これは何故であろうかとしばしば考えてみる。

その1つの理由として、教授側の教授方法がある。何年間も同じ内容を講義されたり、学部学生にはこの位の内容でよからうと講義される。しかし、これも、学部学生の学力程度に対する配慮と個人的研究による多忙のためであればしかたのないものである。そして、教授側に全責任があるのではなく、学生側にもかなりの責任がある。三年生にもなると、単位数さえ取ればよいという安易な気持ちがあり、講義に出席するだけという態度が、講義に対する無気力さを生むことになる。

以上のことは、教授と学生の間に見えぬ壁が存在し、相互の意志の疎通を妨げているという事実に基づくのである。この意志の疎通を妨害しているものは、講義のマスプロ化であり、この状態では自然と教授から学生への一方的な講義とならざるえないのである。このような点を是正するために、少数精鋭の講義が必要であり、その中で講義を形成している一員であるという自覚が生まれてくる。実際、私達が二年生の時に経験した演習科目は、まさにこのために設置されたものであり、その効果は多大なものであった。

四年生になれば、各研究室に配属され、各教授との対話も盛んとなり、ゼミも数多く開かれるので、研究しているという実感が沸いてくるものである。そこで、教授の方々にお願いしたいのであるが、2,3年生にこの演習科目をふやしてもらいたいのである。そうすれば、壁も少しずつなくなり、教室も活気に満ちた場所となるであろうから……。

応化会ヤングの会(仮称)の提案 (現代版“六日会”)

今から約40年前、応用化学会の定例行事の一つに“六日会”という集りがあり、学生を中心に先生方や卒業生の有志が参加して講演を聞く形式の、親睦会的なものがあつたそうです。当時学生だった方々は、学生時代に先輩を通じて社会を見る目を養ったことなど、六日会の意義を一致して認めており、現在このような催しがないのを残念がっておられます。

この度、応化会定例行事復活の一試みとして、若手の運営委員の間で昔の六日会の現代版というべき集りを、下記要項で行いたいと立案しております。この案について、会の名前をはじめ、種々のご意見、ご提案がありましたら、本会庶務委員（宇佐美教授）までご連絡下さい。

記

対象：学生（大学院を含む）を中心に先生方および若手の卒業生（新制8回生ぐらいまで）の有志が参加

内容：講師による講演，討論会，懇談

テーマ：化学工業を中心に毎回定める。

会場：理工学部教室

開催頻度：年4～5回程度

開催日：土曜日午後／週日の授業終了後

会費：原則として無料（茶菓程度は用意）とし、財源は、応化会別予算、会社や先輩からのご寄付による。

名手孝之（新9回，東燃石油化学）

教室だより

新任人事 静岡大学工学部助教授酒井清孝氏（新15回，大修15回，大博）はこのたび当教室に助教授として嘱任された。担当科目：化学工学，反応工学

会 務 報 告

〔庶 務〕

役員会 48，6，8 大隈会館

昭和48，49年度役員としてつぎの方々がきまった。

会 長 棚橋幹一

副 会 長 鎮目達雄，大友恒夫，城 塚 正

運営委員 教室側，大坪義雄，篠原 功，森田義郎，城 塚 正，鈴木晴男，佐 藤 匡
宇佐美昭次，豊 倉 賢

卒業生側，色川御胤，若山一彦，鎮目達雄，棚橋幹一，中岡敏雄，百武寛
大友恒夫，清水常一，中曽根莊三，赤林 宏，百目鬼清，木邑隆保，
柳 沢 亘，名手孝之，前島哲夫，

委 員 庶務，宇佐美昭次， 会計，鈴木晴男， 編集，佐 藤 匡

1. 例年行なわれている秋の常会をとりやめ、明春5～6月に春の常会を応化50年誌の出版披露をかねて少し盛大に行なうことにした。
2. 応化50年誌の進行状況が大坪編集委員長より報告され予算面について検討した。
3. 新規事業として在学生および若い卒業生を対象とした公開講義の開催について協議された。これについては具体的な実施方法については検討中である。

(宇佐美昭次)

〔会 計〕

昭和47年度会計報告

収 支 決 算 表 (自昭和47年4月1日 至昭和48年3月31日)					
収 入			支 出		
費 目	金 額	予 算	費 目	金 額	予 算
前期繰越金	114,305	114,305	会報費	61,730	400,000
正会員会費	895,000	880,000	名簿費	424,490	1,100,000
有志会員会費	6,200		学生会費	457,440	200,000
学生会会費	276,100	240,000	学生会費	38,780	170,000
諸利	109,362	100,000	学生会費	31,221	60,000
寄付金※	1,389,500	0	学生会費	40,000	40,000
名簿積立金	0	1,000,000	学生会費	14,664	30,000
			学生会費	214,500	210,000
			学生会費	35,360	0
			学生会費	9,040	10,000
			学生会費	500	0
			学生会費	1,189,000	0
			学生会費	150,000	0
			学生会費	123,742	(予)114,305
	2,790,467	2,334,305		2,790,467	2,334,305

※50周年寄付金です。寄付者芳名録および使途については記念事業完了後に改めて掲載致す予定です。

貸 借 対 照 表
(昭和48年3月31日)

借 方		貸 方	
費 目	金 額	費 目	金 額
現郵普郵定仮	72,195	前納会費積立金	578,500
振預貯預	34,747	名簿刊行積立金	1,400,000
便通便期	1,099,221	50周年記念事業費	1,189,000
払	690,404	基 次 期 繰 越 金	1,390,000
金替金金金金	2,730,000		123,742
	54,675		
	4,681,242		4,681,242

小林奨学基金利息収支決算表
(自昭和47年4月1日
至昭和48年3月31日)

収 入		支 出	
費 目	金 額	費 目	金 額
前期繰越金	353,218	教員研究費(2名)	250,000
貸付信託収益金	281,016	次期繰越金	389,496
普通預金利息	5,262		
	639,496		639,496

基金(貸付信託)総額 397 万円(小林基金 274 万円, 水野氏 123 万円)

使用済利息, 227.5 万円(教員研究費, 小林賞, 応化科50周年記念事業等)

昭 和 48 年 度 予 算 表

収 入		支 出	
費 目	金 額	費 目	金 額
前期繰越金	123,742	会 報 費	650,000
正学有志会員会費	950,000	名集学 生 会 費	700,000
諸名簿積立金費	270,000	簿会部 会 費	200,000
50周年記念事業費	100,000	支 生 金 部 費	70,000
	700,000	用 集 支 部 費	50,000
	1,189,000	事 雜 品 費	40,000
		雑 周 年 記 念 事 業 費	30,000
		予 備 費	250,000
			20,000
			1,189,000
			133,742
	3,332,742		3,332,742

(鈴木晴男)

昭和49年3月 発行

発 行 早稲田応用化学会
新宿区西大久保4 早大理工学部内

編集兼 佐 藤 匡
発行人

印 刷 堀越研究所

千代田区神田神保町2-20